

今月の聖句
 『鉄は鉄をもって研磨する。
 人はその友によって研磨される。』
 (箴言 第27章17節)

◎5月の予定

5月に予定していた春の遠足、授業参観、保護者会については中止とします。心臓病検診、内科検診、耳鼻咽喉科検診、尿検査、中学校の中間試験については、学校再開後に日程を調整します。

子どもたちの健康を守るため

養護教諭 清水 花葉

新型コロナウイルス感染症の流行により、長い期間の休校が続いています。先生や友達に会えず、勉強や遊びも思うようにできない今は、子どもたちや保護者のみなさまにとって大変辛い時だと思えます。

しかしこの休校期間をただ辛く悲しい時とするのではなく、日常生活を取り戻し、学校を再開するための非常に大切な時と捉えていただきたいと思います。子どもたちの健康を守るため、感染のリスクを減らす積極的な措置とご理解いただき、ご家庭でも感染拡大防止にご協力ください。よろしくお願いいたします。

ステパノの景色



玄関に掲げられた聖句 新庄すが江さんより寄贈

今月号の紙面

学園長のことは

教頭より

春の座談会

—ステパノ学園の子どもたちの

魅力と私の教育観—

中村・上戸・米原・飯田裕美

リレー原稿

澤邊教諭から難波教諭へ

心と体の相談室「無力感とストレス」

スクールカウンセラー 山口滋美

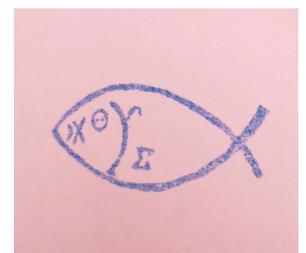
ステパノ今昔 —チャペル—

SAの部屋

STEPHENS NEWS・編集後記

8p 8p 7p 7p 6p 4p 5p 3p 2p

みしるしの
 スタンプ



イクテュス

ギリシア語で「イエス」・「キリスト」・「神の」「子」・「救い主」という五つの単語の頭文字を並べると「イクテュス」という単語になり、それは魚を意味しています。そこから、魚の絵はキリスト教を象徴する最古のシンボルとなっています。このお魚さんにも、中に五つの文字が書いてあります。この絵は、ギリシア語のそれぞれの頭文字に基づいてデザインしてもらったものですが、文字を無くし、線だけで表現する場合もあります。シンプルで分かりやすいですね。(聖書科 咲間)

不定期ですが新コーナーです。

キリスト教につながるシンボル
 マークと、その意味を紹介します。

スタンプ制作 咲間教諭
 スタンプデザイン 赤田教諭



春の座談会

きつと良い日が来る

学園長 小川 正 夫

「学び舎にひびかう子らの弾む声

さやけくあれとひたすら望む」

これは今年還暦を迎えられた今上天皇が歌会始めに詠まれた歌です。

学年末から新学年の初めにかけての大切な時期に学校から子ども達の明るい笑顔と弾んだ笑い声が聞こえなくなりました。子ども達が学校での時間を奪われ、子ども達の声がない学校は学校でなくなりませんが、新型コロナウイルス感染症から子ども達の健康を守る為の緊急事態で自宅待機の学習という対応を選ぶことになりました。

聖ステパノ学園の先生方の誰もが、子ども達一人ひとりの笑顔と声を想い浮かべながら、この歌に詠みこまれた心と同じ思いをもって平常な学校生活に戻ることを願っています。

新型コロナウイルス・パンデミックは文字通り世界中に広がり重篤な感染者を生み出し、多くの人達の生命を脅かし、亡くなる人をたくさん数える状態になっております。

世界に広がるような感染症の流行は歴史の上で何度か登場していて、ペスト、コレラ、ポリオ、天然痘、スペイン風邪が良く知られています。ですが、その他にも数え切れないほどの感染症があり、中でも多くの人が悩まされるインフルエンザ・ウイルスは変異して毎年流行しています。感染予防とワクチンの開発

で対応が進み何とか乗り越えています。

今年に入って急速に感染者を世界中に広げている新型コロナウイルス・パンデミックは、交通事情の進歩で世界が近くなり、利便性が増し人々の行き来も活発になったこともあり、感染症は世界各地に急激に拡大しやすくなっております。各国の医療制度が追い付き抑制するため懸命の努力をしています。

未知の感染症、新型コロナウイルスにはワクチンも特效薬も未開発であり、日本も緊急事態を宣言、医療機関は対応に極めて困難な状況に置かれています。連日連夜、医師、看護師の献身的な治療と看護で危機を乗り越えようとしている姿勢に頭が下がります。

重篤な症状を招く恐れがある未知のウイルスには、これだけ科学技術の進歩、先端医療技術が進歩していても、子ども達への感染を食い止めるためには生活行動を制限し、自粛するといった消極的な対応で子ども達を守っていくようとしているのが現状です。

元気なハイタッチ、握手やハグは勿論、息がかかるほど人に近づかない、食卓を囲んで楽しく会話したり、元気よく歌ったり話すのを控える、外に出て友達と元気に遊ぶのを我慢する、人が集まる場所や観光地への旅行は避ける、他の人がよく触れるものには触らない、公共の交通機関は利用しない、外出後やトイレの後は必ず手を洗う、うがいをする、外食は控える、外出時はマスクを着用する、対面して座らない、遊具や道具は共通のもの

を使わないなどいろいろあります。

規制することだらけの不自由な生活だと思ふと不満やストレスが重なりますが、感染症にかかる人達を少なくし、病床で苦しんでいる人達、亡くなる人達を少なくするために、できる限り積極的に協力していると考えることもできます。家庭や地域での教育力を見直す良い機会にすることもできます。

こうした厳しい状況のもとでも落ち着いて何が必要かを見失わず、時には逆境から人生を学ぶこともあるということに気づく前向きな気持ちを持つことが大切かと思えます。

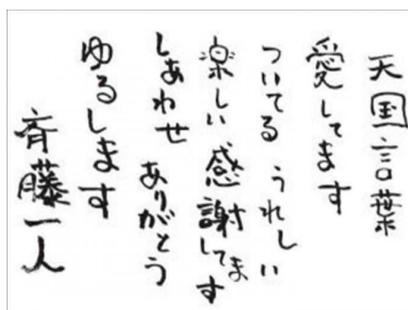
私達は日々いろいろな生活経験を重ねており、この二か月余りの間、毎日のように感染症コロナウイルスの情報を目にし、専門家の立場から様々な意見を聞き、批判的な意見もたくさん耳にしますが、無駄な経験というものはないと私は思います。将来必ず役に立つことがあることは間違いありません。

世界中で猛威を振るっているお馴染みの感染症新型コロナウイルスの画像も実際に目にすることができるようになったのは電子顕微鏡が見せてくれたものですが、遺伝子工学の発展で、人間の体の中には膨大な数のウイルスが存在することがわかり、病気を引き起こすだけでなく健康維持にも役立つものがあるかもしれないという説もあります。

ウイルスは生物の細胞に侵入して猛烈な勢いで増殖するそうですが、人間誕生の歴史より古く三十億年の歴史があるそうです。

優しい心を育む『天国言葉』

中学校教頭（統括） 佐藤 紀明



数年前に友人から誕生日にプレゼントされた斎藤一人さんの『天国言葉』色紙です。当時は友人に「これで佐藤も億万長者の仲間入りだなんで言われたことを思い出します。」

斎藤一人さんは、日本で一番の高額納税者と言われる億万長者です。毎日、この言葉を言い続けてきたそうです。斎藤一人さんの本を何冊か読みましたが、どれも明日から実践したいと前向きになれるものばかりです。

私は億万長者にはなっていませんが（笑）、毎日目にするこの色紙から気持ちや考え方が良い方向になっていくことを実感しています。

斎藤一人さんは、「思わなくてもいい。口にすればいい。」と言います。言葉には『言葉』というパワーがあり、『天国言葉』を唱え続けることで、必ず奇跡が起きるといいます。口から発する言葉、つまり『言葉』は私たちが思っている以上の力を発揮するようです。

『天国言葉』は、相手にもプラスの言葉が伝わり、いつの間にか気持ちもプラスになり、周りの人たちも幸せにすることができず。

『天国言葉』と反対の言葉に『地獄言葉』があります。天国言葉とは真逆な言葉です。

ついていない 不平不満 心配ごと
愚痴、泣き言 悪口、文句 許せない

これらの言葉は、言っている本人も周りの人も不幸にするものです。『天国言葉』を言っている人に不幸な人はなくて、『地獄言葉』を使っている人に幸せな人はいないものです。

私は今年度、聖ステパノ学園の児童・生徒・教職員の全てが『天国言葉』で溢れるようにしたいと考えています。そのためには先ず、自分から実践していきたくと思っています。

ただ、現在は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、緊急事態宣言も出され、学校は入学礼拝式・始業礼拝も行えずに休校が延長されている状態です。本来なら新しい学年で子どもたちの笑顔と活気に溢れているはずが、学校はとても静かな日々を過ごしています。

先行き不透明で、外出も制限され学校にも通えずストレスも溜まっていると思います。でも、こんな時だからこそ、家族や周りの

人に『天国言葉』を使って欲しいと思います。ぜひ、自分自身と家族や周りの人を誰よりも幸せにする発信源となって欲しいと思います。『優しい心を育む学校』が聖ステパノ学園です。学校全体が、『天国言葉』で溢れることが『優しい心』が育まれることに繋がります。一日も早い学校の再開を楽しみにしています。

慌てず・焦らず

小学校教頭 長谷川 誠子

なかなか新学期が始められない状況に、大人も子どもも日々大きなストレスを感じていることでしょうか。通常と大きく違う状況は、不安と我慢の生活になっています。その様な生活により何となく疲れを感じているのではないのでしょうか。この様な状態を「コロナ疲れ」というそうです。こんな時は、①お笑いや明るい話題の動画など、明るい話題に触れる②人と話をする③いつもより1〜2時間多く眠ると、この3つを行うことが良いと心理カウンセラーの下園壮太先生は言っています。学校が始まって生活リズムが整うまでは、やはりストレスがかかるそうです。どの子どももみんないろいろな場面でその子なりに頑張っていますので、私たちは、そのことを理解し、心が落ち着くまでは寄り添い、励ましていかなければなりません。そのためには、私達自身も下園先生の言われた3つのことを取り入れる必要があります。

学校の方は、子どもたちがいつ登校してもいいように、先生方で教室環境を整え、学習の準備も進めています。今、校内の木々は新緑が美しく、爽やかな季節を迎えています。先生も校舎もステパノの森も児童・生徒のみなさんと会えるのをとても楽しみにしています。

ステパノ学園の子どもたちの魅力と私の教育観

《ステパノ学園、また学園の子どもについて、思っていることを聞かせてください。》

(上戸) 優しいというか、相手のことをすべて受けとめる子どもが多いですね。困っていたら助けるし、喧嘩していても目標があればみんなでそっちに向かっていこうみたいなことが、当たり前前できています。

(飯田裕) 私は、勤めるんだったらこしか考えられない、とずっと思っていました。うちの子たちは、おもしろい。とにかく、一緒にいると、私が素直になれる。うそをつけない。楽しい。幸せだなと思わせてくれる。だから、私も彼らのために応えなきゃって思ってしまう。懸命な彼らの顔、ちよつと中学生でもここまで真剣な顔をする子どもたちを見る機会はそうそうないかなと、いつも思っています。

(米原) 他校の校長先生の発言に「生徒に対しては、教員とか大人とか関係なく、人と人として話をしなさい」と先生たちに言っている」とあったのですが、ステパノもやってるな、と。思ってた。そうせざるを得ないというか、そうすることで一緒に進んで行けるのがステパノだなと思います。僕は教員としてここが初任なので、最初はどこかで「先生」としてやらなければ、というところがあったのかも

しれない。でも、本気でぶつかりにくくほどに、子どもとの関係性ができていき、それが学びをするにしても、何かを作り上げていくにしても、ベースになっていると思う。それが小学校一年生から中学生まで共通しているものかなと思います。

(上戸) 僕も「人と人として」というキーワードには共感を覚えます。

(飯田裕) やっぱ子どもといえど、尊敬するところもある。この子たちすごいな、って。

(米原) その尊敬を、大人だから子どもだから、って言うんじゃないかと、素直に出せませよ。本当にすごいねって。

(中村) いろんな環境の子が来てるから、なんか一つのカラーというか、一緒にできないじゃないですか。カテゴライズできないから。「これだめよ」って言っても平気でそれやるから。(一同笑)

(中村) 決まったことだから、こうだよ、みたいなこといっても、そのうそを見破るのが、子どもたちは得意で、通じない。だからどうしてもその辺の自分の殻は脱がざるを得ないというところがあって。思ったようにはいかないですよ。

(飯田裕) 何一ついけません。だから頭を悩ませますけど、それがまた、おもしろい。

《ところで、外部の方や子どもたちからステパノの先生って仲いいですねとよく言われますが。》

(米原) 一昨年に、何人かの先生で富士山に登りました。他にも、テニスを一緒にやったり、みんなでご飯を一緒に食べたりとか。それがあからこういう議論もできるし、一緒に教材研究なんて話も出来る、そういうベスがすごくしつかりしてるなと思うんですよ。そういう関係がないまま議論をしちゃうと、こうはいかないよなって。

(中村) 校長が、この学校の教師は必然性があった集められたんだ、って言うんです。やっぱ何か、みんな求めてるものがあった、ここに来た、その感覚が割と共通している人が多いのかなあって、感じがするんですよ。僕の場合、一つは自然環境みたいなものはあります。この空気、はあーってひと息吸ったとたん、もうなぜか来なくなっちゃう。もう一つ、キリスト教学校なのに、一番困っている人たちに手を差し伸べるような学校ってあまりなくて、きれいな制服を着せて優秀な子を入れようみたいなね。ちよつとそれ違うんじゃないかなって、思ってたんですけど、ステパノは可能な限り断らずにお受けする、それに対して日々先生たちが走り回る。教えるとか学ぶとかより前に、一緒に走り回る、その魅力、原点みたいな感じ、その良さですよ。それをこの環境の中でできる。そういうことが好きな人が集まっているんじゃないのかな。自然環境と、キリスト教と、子どもたちと距離近く戯れる、その三つあたりが主要な要素。

(飯田裕) 私はうちの魅力は何かと言われたら、まず子ども。あと先生。何がすごいって、子どもにむける情熱を持っている先生がとにかく多い。我慢できるなって思いますね。

(上戸) 最初はよく、うちに帰ると玄関で寝ていました。何もできない。それでも次の日は起きていこうという気になるし、今思えば、それで育ててもらった。子ども達に育ててもらったなあっていう気がするから、たぶんまたそれを繰り返して、子どもにむけるパワーになるのかなって。あとは、一生懸命やっている先生には必ず助けを出してくれる先生たちが多い。ちゃんと計画立ててこう思ういでこうやりたいんですって言えば、黙ってでも手伝ってくれる。熱意と真面目さがあれば、きつと助けてくれるっていう思いはすごくしてましたね。で、そうやっていくうちに深い関係になって、いろんなことが話せる仲間づくりみたいのができてたのかなあ。

(中村) 僕はステパノの先生に「なる」、本当の意味で「なれる」、って何年かかかるなあって思っているんですけど。一番最初に差を感じたのが、あと何年かすればこの子はちゃんとなるよ、っていう確信を持っているんですよ、この先生たちは。そして、やっぱり二年三年すると、歩き回ってた子がちよつと落ち着いて座ってるとかね、ちゃんとあいさつするようになったとか、そういうのが見られる。だから、教育っていうのは現状もあるけど、その先に何か光が見られるかどうか、つ

ていう気がしますね。

(米原) 3月のステパノだよりで、卒業した生徒のお母さんの原稿、すごく感銘を受けました。転入前の面談で、このまま育つわけじゃないですからって学園長に言われて、とても信じられなかったけど、今本当に立派に成長して卒業していく、って書いてあって、まさに今、中村先生がおっしゃった事じゃないですか。ちゃんとそれを、保護者とも共有ができていることが、すごく強みだなあって感じます。

《先生方の教育観に話を進めていただけますか》

(上戸) 言われるがままじゃなく、ちゃんと自分で判断をしてやっていけるような人になってほしいという思いはいつも持っている。社会に出たらいろいろあるけど、しっかり生きていってほしいなって思う。じゃあ今何ができるのかなど、細かい所から大事にするのと、いろんなものが繋がってるんだっていう感じは忘れずにいきたいです。

(米原) 自分で変えていける、っていう実感をちゃんと持っていてほしいと思いますよね。ステパノまつりの実行委員会で、思いのほか早く自分たちから企画を立ち上げてやってきて、それは去年本当に感無量だったんです。授業でも、子どもたちがこつちのカテゴライズからはみ出ていく、それを認めると良い方向に行く。その経験をちゃんと積み重ねるの

って、自分たちで周りを変えていけるっていう実感になっていくと思うんですよ。それはこれから指示を聞くだけの人間になるのか、それともこの社会の一員として自分で動いていくのかっていうことにもなる。ひよつとすると、上戸先生と重なるところがあるかもしれないですね。

(飯田裕) うちの子どもたちには「自立」してほしい。9年間しか私たちは一緒にいられない、それから保護者も年齢的に言ったら彼らよりも早くにいなくなってしまう。ひとりになったときにどうやって生きていくか、が少しも助けられるといいなあ、とずつともがいています。生きる上で一番大事なことって何かと考えると、「食べる」こと。今の世の中、簡単に食べられますけど、だげどやはり手で行くことの大切さ、それだけは伝えていきたい。

(中村) カリキュラムももちろん大事だけど、子どもの状況の方がもつと大事だということ、それをよしとしている学校なので、いわば使命ですよね。それが十分にできるっていうところを、動かさない。そのうえで、もつといいカリキュラム、いい道具、教材、その辺の研究を進めていかなきゃいけない。だけど、限られた時間の中で、子どもたちに接するか、先生たちが話したりね、チームワークを強くしていくこと。それを見失わないようにすることが大事ではないでしょうか。まだ、できることはたくさんあります。

リレー原稿

今月号から、教員同士でのリレー原稿企画が始まりました。誰から誰へ、どんな話につながるか。乞うご期待。

教諭 澤邊 嵩介

第一回は、私からスタートです。

さて、新年度が始まり幾分か立ちました。学園の桜の花びらもはらはらと散り、新緑が輝く中、グラウンドには子どもたちの笑い声が……とはいかず、いまだに休校が続いております。

かくゆう私も、緊急事態宣言が出たため在宅勤務となり、この原稿も自宅のPCで書いております。自宅だと思うように筆が進まず、調子に乗ってきたと思ったら、愛猫のタマに妨害され……ペットを飼っている方にとつては、さもありなんといったところでしょうか。

このような状況ですが、教員一同学校再開に向けて着々と準備を進めています。休校中の自宅学習の課題作成や、学校再開後の子どもたちの健康と安全の守るための運営計画、最近では授業を動画に撮影してオンライン配信も試験的に行われ始めています。小学校は、新しくなった教科書を各家庭に配布し、今年度から行うプログラミング教育についての知見を広めながら授業の準備などに取り組んでいます。

多くの学校で、プログラミング教育の際に

用いられている「Scratch」というフリーソフトは、自宅のPCでも簡単に扱えるものです。そのため、私はこの在宅勤務の間、暇さえあればScratchを開いて、様々なプログラミングを試してみたり、ちよつとしたゲームを作ってみたり、おそらく授業で初めてのものに触れた子どものように夢中になって取り組んでいます。授業で子どもたちと一緒に取り組むのが楽しみです。

このように、ステパノの他の先生たちも学校が再開し、子どもたちと楽しく学べるようにそれぞれの過ごし方で英気を養いながら様々な準備をしていることと思います。それでは、難波先生は、新しい一年間の始まりをどのように過ごしているのでしょうか？伺ってみましょう。

教諭 難波 寛

澤邊先生からのご指名を頂きましたので、難波がリレーを引き継ぎたいと思います。

私はこの期間いろいろな準備をして過ごしています。学年通信の作成、教室の準備、教科書等の配布準備、授業準備などなどです。中学校2年生の皆さんが学校生活で困ることの無いようにと出来ることをこつこつと準備を進めています。

私は東日本大震災のときの経験から、心配ごとがあるときはこのように考えて生活しています。

「いま自分のできることをしよう。」

大震災のときは不安を抱えて生活をしなければなりません。私自身も今回の新型コロナウイルスの事は心配が頭から離れませんでした。そんな時、私は「今できることはなにか。」と考えるようにしています。できることはそう多くはありませんが、一つひとつ細かな事でも積極的にやってみることが必ずこの先、役に立つと思います。行動していると、不思議と心も楽になります。毎日不安に感じている方は、そんな風に気持ちを切り替えてみてはいかがでしょうか。

最後に、最近私の考えていることを書いて次の方にお願ひしたいと思います。

現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響で緊急事態宣言が日本全国に出され、外出の制限が全国に広まりました。これは、日本社会、さらに人類の危機ではないかと思ひます。

「人は社会的動物」と言われますが、その根本は人と人が関わることにありと思ひます。ということは外出制限というのは、人間としての生活まで制限されていることになり、このような状況でどのように人間としての社会生活をしていくのかというのは、今後人類の課題になると思ひます。

そこで、この状況で私たち教員はどのような教育を目指していくことが可能なのかというところを、次の方に投げかけてみたいと思ひます。

次は、上戸先生、よろしくお願ひします。

急な一斉休校の初期には、子ども対応で出勤できなくなった保護者の経済的な困り感が話題になりました。しばらくすると普段と違う生活に「もう限界」と悲鳴をあげる母親や子どもの姿が取り上げられるようになってきました。一方で「この機会を使って普段できないことに取り組んでみました」という新聞の投書も目につきました。苦手科目の復習に取り組んでいるという高校生、災害食作りチャレンジしたという親子、ゆで卵やラーメンが作れるようになったという小学生兄弟。

今の状況を「ストレス」と感じる人とそうでない人に分かれているように感じました。

心理学はストレスをもたらす出来事をストレスサーと呼びます。進学・就職・結婚・老化のように、成長の過程で多くの人が必然的に直面する「発達のなストレスサー」と、事故・災害・病気・死別のように予期できない「偶発的なストレスサー」があり、多くの場合はストレスサーにうまく対処して、その危機を乗り越え成長していくとされています。しかし、「コントロール不能な体験」は精神的病理を引き起こすといわれています。

今はまさに、「先が見えない」「自分の力ではどうにもできない」状況です。受け身の被害的に捉えて、不平不満の渦に巻き込まれるか、「コントロール可能な側面」に目を向け、

主体的な行動をとるか、分かれ道のような気がします。被害者意識はストレスを倍増させます。「くさせられている」を「自ら」くしている」に変換することがストレスに飲み込まれない一方策ではないでしょうか。

3月の休校時に、ステパノ小の低学年の先生から「週に一度、家庭に電話しているけど、みんな自分のやりたいことが存分できて、意外に元気でした。」と聞き、『さすがステパノっ子』と感心し、無力感なんて入り込む隙間もない生活ぶりが嬉しかったです。

とはいえ、休校は5月GW明けまで延び、緊急事態宣言でますます閉塞感が強まってきました。閉じられた空間や限られた人間関係の中で、健康で前向きな気持ちを持ち続けることは至難のわざです。周りの世界が無彩色に見えてきてしまうような自分の気持ちをどう扱ったらよいのでしょうか。

そんな時、精神療法では、その人の持っている「信念」の変化に取り組みます。ものごとの受け取り方が気持ちの落ち込みや悩みを左右すると、同じ状況を別の視点から見たり考えたりする練習をします。つまり「見方を変えれば景色は違って見えてくる」という訳です。

この状況を乗り越え、たくましいステパノっ子や保護者の皆さまに再会した時、ふっつわいた「時間のプレゼント」の過ごし方について、お聴きできることを今から楽しみにしています。

ステパノ今昔



現在の礼拝の様子

聖ステパノ学園で、最初に建てられたのが、このチャペルでした。多くの子どもと教職員が共に集い、奉げられる祈りは今も続き、そしてこれからも続いて行くことでしょう。



1957年当時



草山広子先生にお話を伺いました。

― 幼少期から大磯でお過ごしなのですか。

「大磯小、大磯中の出身で、子どもの頃から学園の前を歩いていました。」

― 幼稚園の先生を長年されていたそうですね。

「学生時代から児童文学など〈児童〉とつくものに惹かれて、夢は小学校の先生でした。中学高校の教員免許を取得した大卒後、絵本などを扱う会社に事務職として勤めた時期や、結婚して子育てに追われた時期も、細々と学びを続けて、幼稚園と小学校の教員免許を取りました。夢中でしたね。」

三人の子どもが小学生の頃には、近隣の幼稚園に勤め、山田雅井先生との出会いから、私塾まきばの立ち上げにご縁が繋がりました。一時期、私塾まきばは、学園の敷地内にあったので、小川学園長先生にお声掛けいただき、基本的には幼稚園に勤めながら、講師として小学校の国語ステップの時間を担当したことが、小学生との出会いでした。

クラス担任の先生と事前に相談しながら授業を作り、準備すればするほど素直に反応して喜んでくれるステパノの子ども達との時間に、幼稚園とはまた違う新鮮な驚きとやりがいを感じました。低学年では詩にまつわる工

作を多く取り入れます。蝶々の出てくる詩では、作った蝶々になり切って話してみる…など、ごっこ遊びの要領で、言葉を体に入れるような時間になっています。

授業を離れた日常のふとした瞬間に、触れ合った詩の一節を口ずさむ子ども達の姿が、とても嬉しく感じられましたね。その一節が将来何かの力になるといいなと思います。そのような関わりが十年ほど続き、五年前に小学校の教員となりました。」

国語ステップは、二〇〇五年に一・二年生から始まり、二〇一五年からは小学校全学年で行っている学園独自の授業です。

「ことば遊びは山の裾野の様なもので、裾野が広がれば広がるほど山は高くなる」という谷川俊太郎さんの言葉から、教科書を学習する上での裾野の役割を果たせないか、という先生方の思いが込められたオリジナルの教材を使用しています。学年が進むと、読解や要約など国語力のスキルに目が向けられますが、言葉の響きやリズムの魅力、詩やお話の世界への感性、人と関わり伝え合う喜び、自分と向き合う表現の模索など、本質的に言葉と親しむことを大切にしている時間だと感じました。ステップでの経験は、一人ひとりの〈山〉の豊かさを彩るものになるのでしょうか。

― 「嫌なこともすぐに忘れてしまう」とおっしゃる柔和な草山先生、目標に向かって長く続いた静かな情熱が、飾らず一歩ずつ夢を実現された秘訣のように感じました。

STEPHEN'S NEWS

【学園の様子】

○ 中学校職員室と、情報処理室が移転しました。

中学校職員室は旧情報処理室の所、情報処理室は旧英語教室の所になりました。

新しい場所に移動して心機一転、使い始めるのが楽しみです。



新中学職員室



新情報処理室

【編集後記】

桜の季節もいつの間にか過ぎ、学園は新緑に囲まれています。ステパノだよりも新企画でスタートです。子どもたちの学園での様子が、早くお伝えできますように。(た)

代表者 学園長 小川 正夫

発行者 聖ステパノ学園小学校・中学校

〒 255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯 868

TEL 0463-611-1298

FAX 0463-611-9739

http://www.stephen-oiiso.ed.jp

二〇二〇年五月十四日(木) 発行 第243号